2026_0125「極夜の駅をよぎる異形の列車」日々の理科 4186 号

お茶の水女子大学　サイエンス＆エデュケーション研究所　田中　千尋

・

この写真は、スウェーデン北部、ヨックモック郡ポルユス駅の駅長事務室に設置された定点カメラがとらえた一枚です。カメラは線路越しの風景を常時見守っており、その向こうにはルーレ川をせき止めて形成されたダム湖が広がっています。人工湖ではありますが、周囲に人工光がほとんどなく、夜には湖面の上空に揺らめくオーロラを観察する絶好の場所でもあります。

ポルユス駅は、現在も鉄道施設として維持されているものの、旅客列車が定期的に運行されるのは夏のわずか二か月ほどに限られます。冬の長い極夜の時期には、駅はほぼ閉鎖状態となり、ホームに人影が見えることはほとんどありません。ただし例外もあり、約 50km 離れたサーメの街ヨックモックで開催される伝統行事「ヨックモック・マーケット」の期間中には、臨時の旅客列車が運行され、多くの人々がこの静かな駅を行き交います。

それ以外の時期でも、完全に線路が眠るわけではありません。真冬であっても、貨物列車や線路・設備の保守点検を行うメンテナンス車両が、時折この駅を通過します。しかし先日、このカメラがとらえたのは、これまでに見たことのない、ひときわ異様な光景でした。貨物列車の積荷として運ばれていたのは、まるで小型の戦車のような装軌車両だったのです。

雪に覆われた極寒の駅構内を、重々しいシルエットの車両が連なって通過していく様子は、平穏な北極圏の風景とは強烈な対照を成していました。スウェーデンの北極圏地域でも、軍事的な備えが着実に強化されつつあるのか――そんな思いが、静かな駅に不意に突きつけられた瞬間でした。初めて目にした、忘れがたい光景です。

（2026 年 1 月下旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔撮影）